特集 | Digital Radiography Now & Future 2026

動画対応DRシステムのNext Stage

技術革新がもたらす診断・治療の最新動向と将来展望

企画協力：市田隆雄　大阪公立大学医学部附属病院中央放射線部技師長

動画対応DRシステムは，FPDの登場以降も技術革新を続け，高画質化と低被ばく化が飛躍的に進みました。ハードウエアの高機能化や治療支援アプリケーションの開発により高精度の手技を支え，治療技術の高度化に貢献しています。また，働き方改革や人材不足への対応として，AIなどのDX技術の導入も期待されています。本特集では，循環器，脳血管・頭頸部，腹部の各領域におけるインターベンションの最新動向を取り上げるとともに，被ばく低減や新技術の展開も紹介し，動画対応DRシステムの将来を展望します。

I 総　論

動画対応DRシステムのNext Stage

――技術革新がもたらす展望，温故知新からのイノベーションへ

市田　隆雄　大阪公立大学医学部附属病院中央放射線部

本企画では，未来を探る動画対応DRシステム（以下，システム）として，最新動向にこだわりをもった情報提供に努める。本企画の内容は，放射線科医，脳神経外科医，循環器内科医，心臓血管外科医，そして診療放射線技師（以下，技師）の共著者含め30名による各領域での動向と展望である。技師には今日の人工知能（AI）様相にも触れていただき，近未来に向けたメッセージをいただくこととした。

ところで振り返ると，2014年から2年スパンで6度目の企画となり，その都度トレンドを探求してきた。科学が立ちとどまることなく進歩をし続けるのと同様，システムも随所にイノベーションがもたらされてきた。ここ最近では，AIによる技術的ブレークスルーが始まっている。その最新情報を，執筆陣の記事で読み取っていただけると幸いである。そうした記事を各論と定義付けして，本稿では総論の立場で技師の思考を紹介したい。筆者の経験したイノベーションは温故知新の考え方で生まれたものであり，かつ医師と技師の円滑な連携がカギであったことから，現行の業界の情勢（社会を含めて）を鑑みながら，前述の視座で将来展望を述べる。

業界情勢，学術団体の動き

1990年代から日本IVR学会（JSIR）では，「三位一体のIVR」として，医師・看護師・技師の連携の大切さが問われていた。その初動から，筆者は所属施設を通じて個人的な三位一体のIVRの実践に努めたが[1]，現在では全国で当たり前の様相となっている。この間を振り返ると，2000年代になって，コ・メディカルがチーム医療の担い手として普及し，その後の一つの形として，厚生労働省

〈0913-8919/26/￥300/論文/JCOPY〉